



私の小宇宙

Sweden

絵・文
深井せつ子

1744年建造の旧市庁舎

由緒ある古都

群島からなる首都ストックホルム。それを抱えるメーラレン湖の北辺に港を持つシグチューナという古都がある。

この古都の街なみは、驚くほど小さい。子どもが力いっぱい走ったから端から端まで3分とはかからないだろう。街なみの家は、全てが木造で、色彩が柔らかで愛らしい。

ところが博物館で、この街の歴史を知って驚嘆した。11世紀から栄えた街なので、大都市ストックホルムが、まだ寒村だった時代に、ここはすでに街として繁栄していたという。そして、市街道路としては、スウェーデン最古のものだとのこと。

中世時代は重要な港として活躍。ストックホルムからの船が毎日寄航し、物資の積み下ろしをしていたようだ。この愛らしい街が、そんなにも歴史あるところだったとは。

塔の絵は、中世時代建築の市庁舎。屋根以外は全て木造の建築物。現在は観光案内所として人々から大切にされている。



シグチューナの木造商家



Dalahäst

私の小宇宙

Sweden

絵・文
深井せつ子

スロイドのちから

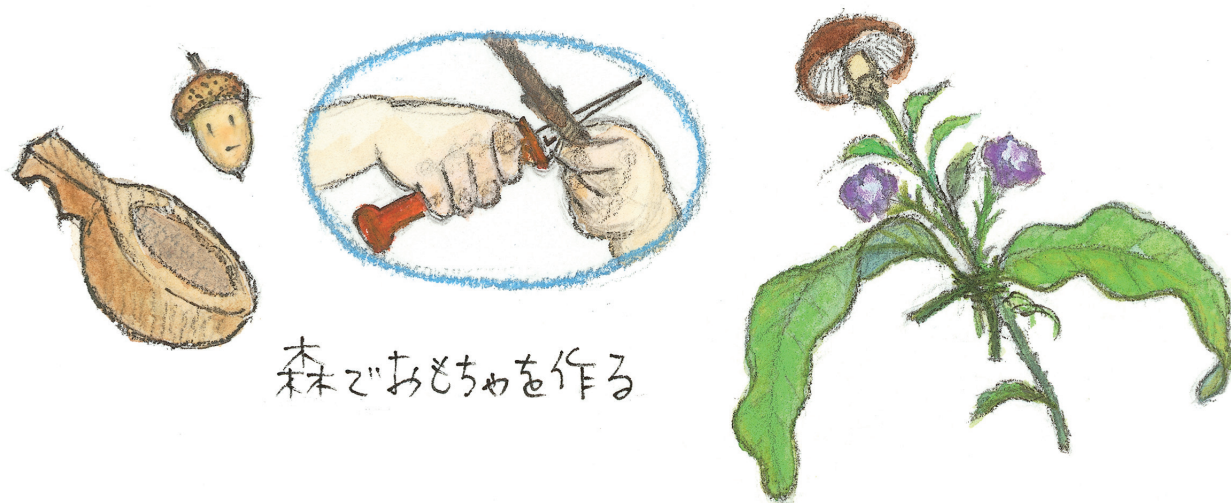
スウェーデンの基礎教育（１年～９年）にはスロイド（SLOID）という授業がある。工芸、手芸などのモノづくり、主に伝統手工芸（Hemslöjd）を学ぶ授業で１２０年以上の伝統があるらしい。

ここで使われる道具は生半可ではない。ナイフ、ノミ、ノコギリ、カナヅチなど、あらゆる大工道具の使い方を学ぶ。機織りも大きな機織り機が用意され、美しいスウェーデン織りを学ぶことが出来る。

たいてい男子は工芸、女子は機織り。えつ、男女平等の国なのに？ いえいえ、それは、権利や頭腦のことで、国の伝統工芸を身に着けるには男子は力仕事、女子は優雅な機織りがよく似合う。

ある時、中学生くらいの学年の廊下に、不思議なダーラナ馬が展示されていた。形もイビツだが、馬の色が凄い。真っ黒とか、青に水玉とか、緑一色とか自由奔放。これは、授業で生徒が作ったものだ。でも、ひとつひとつ、なかなか個性的。９年間しっかり学んで卒業する頃には、みな大工さん顔負けとなる。

こうして「修理・ペンキ塗りあたりまえ男子」が誕生する。素敵なことだ。



木でおどちゃを作る

深井せつ子

画家。北欧各国の清涼な風景に魅かれ、北欧行を重ねながら、個展・出版等で作品の発表を続けている。北欧絵本に『イエータ運河を行く』、『風車がまわった!』、『森はみんなの保育園』、他の地域の絵本に『一枚の布をぐるぐるぐる』など（全て福音館書店発行）。

2015 月刊「母の友」10月号（9/3 発売 福音館書店）にリンドグレン病院取材の記事を掲載

〔ホームページ〕 www.setsuko-fukai.com



小さなベッド。
このような姿勢で眠る。

私の小宇宙

Sweden

絵・文
深井せつ子

スウェーデン・ミニアチュール

首都ストックホルムにあるスカンセン野外博物館は、この国の各地から移築した民家・農家がある。創設立案者のハセーリウス氏は、民俗学者時代に各地を取材して、産業革命の波で、古い家も村もいずれ消滅すると考え、家具の収集から始め、古民家の移築に努めた。だから、ここには、「スウェーデン」がギュッと詰まっている。

スカンセンには何度も訪れているのだが、この9月は、新たな気持ちで取材した。今回は、家や家具についての疑問を、施設案内人に聞いて回った。みな、真剣に応じてくれて、民俗服の案内人たちは頼もしかった。

上の古時計がある部屋の絵は下部の農家の左側。この17世紀の寝台は、今までみたどれよりも小さかった。「どうやって眠るの?」と聞くと民俗服の男女が靴を脱いでベッドに入ってポーズをとってくれた。「えっ、2人用?」と驚くと、「寒いから身体をくっつけて眠るんです。赤ちゃんは2人であたためて。ベビーベッドは夏用ね。」と。この部屋は大きなカマドがあり、暖も灯りもこれだけだったか。キャンドルのある暮らしは、当時は贅沢だったらしい。

時はながれ、いまは部屋で寒さに凍えることもない。でもスカンセンでは、大切な暮らしの原点を伝えつつけている。



S. Fukai

窓は 鉄とガラス製。

